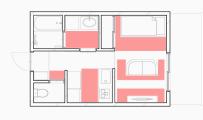


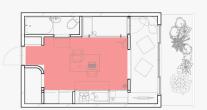


①発端:モノと人の関係

あるためにはモノと人のための余白があってはじめて成立する。 実は空間を有効に活用できていないのではないだろうか。



②現在:独立した機能の配置

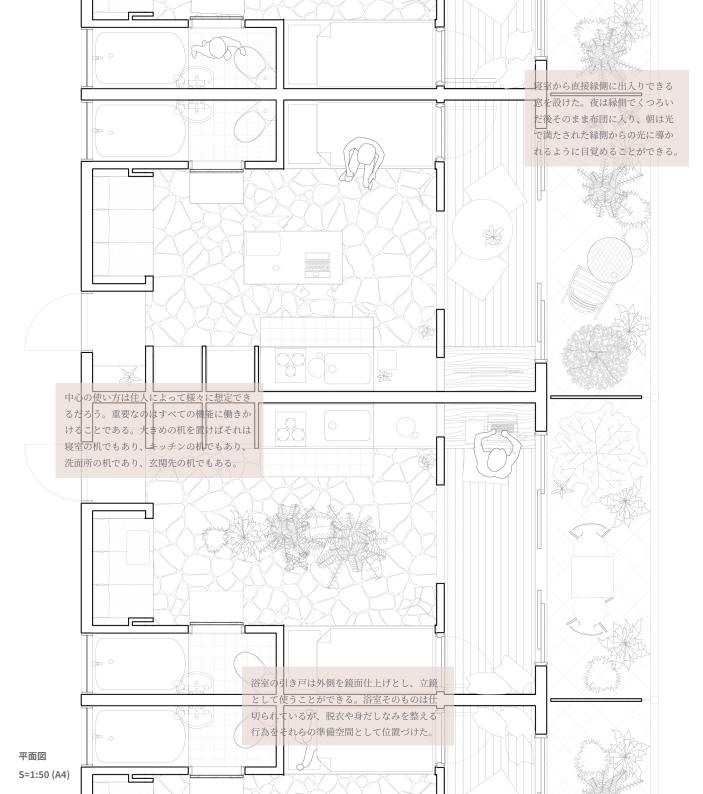


③提案:新たな賃貸住宅のかたち

私たちはキッチンを思い浮かべるとき、キッチン台だけでなく前 一般的な賃貸住宅ではそれらの機能ごとに配置されるため、各残 本提案では、機能が成立するための「モノ」と「人のための余白」 中心に現れた領域はすべての生活機能が半分領域を侵犯してくる に人が立つためのスペースまで想像する。生活機能が「機能」で 余空間はそれぞれの機能を満たすために独立し、干渉し合わない。 を分解して捉え直し、前者を壁の中に、後者を部屋の中心に集め ような、つかみどころのない「場」である。ワンルームの中に内 るよう再配置した。すると、中心にもう一つの領域が生まれた。 外という意識が芽生え、中庭のようにふるまう。



④未来:自由に使える外のような場









使い倒される内外

ワンルームの窓辺は家具が押し寄せ日常とは距離のある空間であることが多いが、境界線上を 小上がりにし、家具的につくることで物理的にも心理的にも生活が外に近くなる。今回の提案範 囲ではないが、相対的にバルコニーもよく使われるようになり、賃貸集合住宅の味気ないファサー ドに人々の生き生きとした生活が現れてくることを目指している。